Bull. Kagoshima Pref, College, 62（2011），57-67

Endeavour の補部に見る通時的な変化ついて

A Study of the Diachronic Changes in the Complement to the Verb "*Endeavour*"

遠　峯　伸一郎

TOMINE　Shin-ichiro

キーワード：英語史，endeavour，補部，意味変化，統語変化

１．はじめに

現代英語（以下 PE）[1]の動詞 endeavour は 'exert oneself' の意味を持ち，その補部に to 不定詞を取る (Green (1974:62-63))。

(1) Bill endeavored *to answer the question*.[2] [ibid.:62]

(1) に見るように，補部の to 不定詞は endeavour の表す動作（労苦）の目的を表す。

ModE では，(1) のような自動詞用法に加えて (2) のような他動詞用法も見られた。

(2) a. And consequently it is a precept, or general rule of reason: that every man ought to *endeavour peace*, as far as he has hope of obtaining it; [*Leviathan*, (ed.) Macpherson (1985:190)]

b. The Muscovites how submissive and slavish soever they may be, will *endeavour the recovery of their freedom*. (1662 J. Davies tr. *Olearius' Voy. Amb*. 114) [3] [*OED*]

(3) *John *endeavored the seduction of Sabina*. (PE) [Green (1974:64)]

(2a, b) で動詞 endeavour が労苦の目的を表す名詞句を目的語として取ることに注意されたい。PE では (3) に見るとおり他動詞用法は不可能である。

Green (1974:62-65) は *OED* の endeavour の項目にある例文を挙げて，(3) に見られる他動詞用法の消失が，主語と同一指示の目的語を取る用法の消失に起因すると主張する。Endeavour は英語に現れ始めた ME 末期から ModE にかけて 'exert' の意味で，主語と同一指示の目的語を取

1　本論文では，1100年から1500年までの英語を中英語（以下 ME），1500年から1900年までの英語を近代英語（以下 ModE），1900年以降の英語を PE とする。

2　例文のイタリクスは筆者による。以下も特に断りがない限り同じ。

3　*The Oxford English Dictionary* (以下*OED*), *Middle English Dictionary* (以下*MED*) からの用例の出典についてはそれぞれの書式を踏襲した。

る他動詞用法を持った。

(4) a. *Endevoir youre self* and put to your hand and spare no cost. (1491)
　b. Marcus Aurelius. . .*endeuoured his power* to persecute the Christians. (1574) [Green (1974:64)]

主語と同一指示の目的語は，(4a) のように再帰代名詞であったり，(4b) のように主語の能力などを表して主語の一部であると解される名詞句である。Green (ibid.) によれば，このような主語と同一指示の目的語が endeavour に編入され，endeavour 自体が目的語を含んでいると解されて自動詞化したために, (2a, b) のような他動詞用法が不可能になった。なお, Green (ibid.) は, (2) の他動詞用法は 'exert' の意味の endeavour に目的の概念が組み込まれたものであるとしている。(5) を参照されたい。

(5) 主語と非同一指示の目的語を取る用法：endeavour(=exert-oneself-for-the-purpose-of) *object*

'exert' の意味の endeavour には，(2), (4) の他動詞用法に加え，'exert oneself' を表して目的を表す要素を取らない自動詞用法があった。

(6) The pardon of his Holines, giuen to all ... that *indeuor in this quarrel*. (1588) [Green (1974:65)]

(6) では，indeuor は indeuor themselves と見なされ，前置詞句 in this quarrel は労苦の目的を表していない。なお，この用法は PE では容認されない。

(2), (4) の他動詞用法と (6) の自動詞用法は "some time in the recent past" (ibid.: 65) に消失し，endeavour の意味は主語と同一指示の目的語を編入して生じた 'exert oneself' に限定された。その同時期に，PE に見られる補部の省略に対する制約が生じたと Green (ibid.) は主張する。次の例を観察されたい。

(7) a.　I couldn't open the door, although I *exerted myself*.
　b. *John couldn't convince the Dean, although he *endeavored*.
　c.　I was instructed to persuade two senators, and I *endeavored to do so*. [Green (1972:64-65)]
(6) The pardon of his Holines, giuen to all ... that *indeuor* in this quarrel.

(7) は PE のデータである。(7a) に見るように動詞 exert は目的を表す要素を取る必要はない。これに対して，(7b, c) に見るように，'exert oneself' を意味する endeavour は目的を表す補部を取る必要がある。[4]これらの事実から，Green (ibid.) は，endeavour の 'exert' から 'exert oneself' へ意味変化が (6) の自動詞用法を廃れさせたと主張する。

以上の Green の観察と提案をまとめる。Endeavour はかつての英語で２種類の他動詞用法および (1), (6) のような自動詞用法を持った。ModE のある時期に主語と同一指示の目的語が endeavour に編入され endeavour は自動詞化した。これにより (2), (4) に見られる他動詞用法が廃れただけでなく，endeavour の意味が 'exert oneself' に変化したことで目的を表す要素が必須になり，(6) の自動詞用法も廃れた。PE には (1) の用法が残った。

本論文では，*OED*, *MED* の全文検索を行って endeavour の ME から ModE の用例を収集し，[5]その補部に見られる通時的変化について，Green (ibid.) より規模の大きい資料を提示する。そしてその資料をもとに，主語と同一指示の目的語の編入によって endeavour が自動詞化したとする彼女の主張を検証する。そして，彼女が "some time in the recent past"(ibid.:65) としている他動詞用法と補部を取らない自動詞用法消失の時期を推定する。

本論文の構成は次の通りである。第２節では検索から得られたデータを紹介する。第３節では，第２節で示されたデータにもとづいて Green の主張を検証し，他動詞用法と補部を取らない自動詞用法が廃れた時期を推定する。第４節は本論文の結論と今後に残された課題を示す。

２．事実

本論文で収集したデータを構文と年代ごとに分類して次の表に示す。原則として50年ごとに区切って例の数を示すが，15世紀については例の数が少ないので２つに分割しない。

4　補部の一部が省略された次のような例の容認可能性は (7b, c) の中間に位置するようである。
(i) ?I was instructed to persuade two senators, and *I endeavored to*.
(ii) *Bill was endeavoring to convince the Dean, and Janet was also *endeavoring to*. [ibid.:65]
補部の具現の程度が文法性に影響を与えているようであり興味深いが，本論ではこれ以上立ち入らない。

5　*OED* は CD-ROM 版（検索ソフト Version1.14 (1994)）を使用した。*MED* はウェブ版を利用した。いずれも記載された異綴り形をすべて検索対象とした。

表１：*OED* における動詞 endeavour を含む例の数 [6]

取る要素 ＼ 年代	他動詞用法				自動詞用法				計
	主語と同一指示の目的語			主語と非同一指示の目的語	that 節[8]	前置詞句	to 不定詞[9]	ϕ	
	+ to 不定詞	+ 前置詞句	+ ϕ[7]						
1401-1500	0	1	3	0	0	0	1	0	5
1501-1550	8	2	2	1	0	1	4	0	18
1551-1600	4	2	2	4	1	0	29	2	44
1601-1650	5	0	3	17	2	3	74	6	110
1651-1700	4	0	1	20	4	4	166	2	201
1701-1750	0	0	0	2	1	7	155	0	165
1751-1800	0	0	0	3	1	2	159	0	165
1801-1850	1	0	0	1	0	0	206	0	208
1851-1900	1	0	0	3	0	3	200	0	207
計	23	5	11	51	9	20	994	10	1123

例の総数は年代ごとに異なる。各用法の盛衰を明らかにするため，表１の資料を100例ごとの頻度に換算して表２に示す。

6　他動詞用法の，主語と同一指示の目的語を取る用法については後続の要素によって３種類に下位分類した。
間接疑問を取る３例と受動態の８例は本論の考察の対象外とした。前者の例を (i), (ii) に，後者の例を (iii), (iv) に挙げる。
(i) Euery man *endeuored his thoughts how to make his duty, love, etc. encrese to him*. (1606 G. W[oodcocke] tr. *Hist. Ivstine* 124 b) [*OED*]
(ii) I did not disbelieve..but yet I thought some in the company had been *endeavouring who should pitch the bar farthest*. (1712 Addison *Spect*. No. 538⁋ 5) [*OED*]
(iii) Had it never *been endeavoured* until now. (1871 Ruskin *Fors Clav*. viii. 17) [*OED*]
(iv) An overstreining conjecture *which is not here endeavoured to be asserted*. (1671 F. Phillips *Reg. Necess*. 417) [*OED*]

7　目的を表す要素を伴わない例の数を示す。以下も同じ。

8　*OED* の年代表記が 16.. となっている１例は1601-1650に分類した。

9　15世紀の例の年代は *OED* は c1400, *MED* は a1450 としている。*OED* の示す年代が15世紀にきわめて近く，*MED* も年代を15世紀としているので，本論ではこれを15世紀の例であるとした。

表２：100例ごとの例の数[10]

取る要素 / 年代	他動詞用法				自動詞用法			
	主語と同一指示の目的語			主語と非同一指示の目的語	that 節	前置詞句	to 不定詞	ϕ
	+ to 不定詞	+ 前置詞句	+ϕ					
1401-1500	0	20	60	0	0	0	20	0
1501-1550	44.4	11.1	11.1	5.5	0	5.5	22.2	0
1551-1600	9	4.5	4.5	9	2.2	0	65.9	4.5
1601-1650	4.5	0	2.7	15.4	1.8	2.7	67.2	5.4
1651-1700	1.9	0	0.4	9.9	1.9	1.9	82.5	0.9
1701-1750	0	0	0	1.2	0.6	4.2	93.9	0
1751-1800	0	0	0	1.8	0.6	1.2	96.3	0
1801-1850	0.4	0	0	0.4	0	0	99	0
1851-1900	0.4	0	0	1.4	0	1.4	96.6	0

表１，２を見ると，endeavour はがんらい他動詞用法が自動詞用法よりも優勢だったが，時代が下るにつれて他動詞用法が衰退し，18世紀以降は，ほぼ自動詞用法に限られるようになったことが分かる。そして自動詞用法では，that 節を取る用法と前置詞句を取る用法が17～18世紀に衰退し，19世紀以降は，ほぼ to 不定詞を取る用法に限られるようになる。以下で各用法について観察する。

他動詞用法では，主語と同一指示の目的語を取る例が主に15世紀から17世紀に見られる。18世紀には例がなく，19世紀に計２例見られるが，これは100例ごとの頻度に換算すると0.4に過ぎない。次に例を挙げる。

(8) a. He..moche *endeuoyred hym to make* hym to lerne the deuyne Scripture. (1483 Caxton *Gold. Leg.* 422/3) [*OED*]

b. Alexander..*endeavoured what he could to ingrandize* the Title of Cardinal. (1670 G. H. *Hist. Cardinals*, iii. i. 225) [*OED*]

c. Like gode and true Englishmen to *endover themselfs* with all there powers *for the defence of them, there wifs, chylderyn, and godes*. ((1485) *Paston* 6.84) [*MED*]

d. We shall *endevor ourselfs*. (1495-6 *Plumpton Corr.* 115) [*OED*]

10　小数点２位以下は切り捨てた。

e. Maximilian *endeuored al his power against the Turke*. (1606 G. W[oodcocke] tr. *Hist. Ivstine*. Ll. 5b) [*OED*]

(8a) では endeuoyred が再帰代名詞 hym を取り，さらに目的を表す to 不定詞を従えている。(8b) では endeavoured が主語と同一指示の目的語 what he could と目的を表す to 不定詞を取る。(8c) では endover に再帰代名詞 themselfs と目的を表す前置詞句 for the defence of them, there wifs, chylderyn, and godes が後続している。(8d) では endevor に再帰代名詞だけが後続する。(8e) では，主語と同一指示の目的語の後に続く前置詞句は労苦の目的を表さない。以上 (8) の各例を見ると，主語と同一指示の目的語を取る他動詞用法では目的語以外の要素が必須でなかったことが分かる。

Endeavour には主語と同一指示でない目的語を取る他動詞用法もあった。第 1 節で触れた通りこの目的語は労苦の目的を表す。この用法は主に16～17世紀に観察される。100例ごとの頻度を見ると, 16～17世紀には 9～15ほどであるが, 18世紀に入ると急激に低下し0.4～1.8となる。

(9) a. He who *endeavours the cure of our intellectual maladies*, mistakes their cause. (1751 Johnson *Rambler* No. 876) [*OED*]

b. We shall..*endeavour the extirpation of Popery*. (1647 Clarendon *Hist. Reb*. (1703) II. vii. 288) [*OED*]

(2a) And consequently it is a precept, or general rule of reason: that every man ought to *endeavour peace*, ...

(2a') And consequently it is a precept, or general rule of reason: that every man ought to *endeavour <u>to obtain</u> peace*, ...

(9a, b) では，労苦の目的を表す目的語 cure, extirpation はそれぞれ動詞 cure, extirpate から派生された行為名詞である。これに対して (2a) の目的語 peace では，(9a, b) で cure と extirpation に見られたような動詞との派生関係はない。(2a) においては，(2a') のように目的語 peace の前に to obtain などの to 不定詞が了解されていると考えられる。[11]なお，この他動詞用法でも目的語以外の要素は随意的である。

次に自動詞用法に移ろう。まず，endeavour が to 不定詞を従える例は15世紀から PE まで見られる。次に一例を挙げる。

(10) Every man that means to live well, *endeavours to trust* to himself. (1594 Shakes. *Rich*. III, i. iv) [*OED*]

11　同様の現象は PE においても見られる。
(i) John tried the lock. [Green (ibid.:54)]
(i) においては try の目的語 the lock の前に to open などの動詞が補われて解釈される。

To 不定詞を取る例では，endeavour の主語はほとんどの場合，人または人に準ずる有意志の存在であるが，17世紀から19世紀に主語が無生物になる例が観察される。

(11) a. The whole energy of electricity depends on its tension, or the force with which *it endeavours* to fly off from the electrified body. (1785 G. Adams *Essay on Electricity* (ed. 2) x. 208) [*OED*]
b. As if *the poyson endeavoured* to convert him into a Dogge. (1651 Hobbes *Leviath*. ii. xxix. 171) [*OED*]
c. It has been said, that *all fluids endeavour* to preserve their level; and .. that a body pressing on the surface, tended to destroy that level. (1774 Goldsm. *Nat*. *Hist*. (1776) I. 190) [*OED*]

これらの例では，主語がそれぞれ it(=the whole energy of electricity), the poyson, all fluids と無生物になっている。そのため endeavour が tend の意味に解され，to 不定詞は主語が内在的に持つ性質を表す。このような例は17世紀に６例，18世紀に８例，19世紀に６例見られる。

ModE では endeavour が that 節を従える用法もあった。この用法は主に16世紀から17世紀に例が見られる。16世紀後半から17世紀は100例中の頻度が1.8～2.2だが，18世紀には0.6に低下する。

(12) a. It were more charitable to *endeavour that the errors might be taken away*. (16.. Father Walsh in *Scotsman* (1883) 17 Sept. 2/6) [*OED*]
b. I have lusted earnestly, and *endeavoured* carefully .. *that these little books .. might stand instead of many bigger books*. (1761 Sterne *Tr. Shandy* IV. xxii) [*OED*]
c. Let us *endeavour our recruits be suitable to our expence*. (1662 W. Gurnall *Chr. in Arm*. verse 17. ii. xxx. §1 (1669) 334/2) [*OED*]

That 節を従える例すべてにおいて endeavour の主語と従属節の主語は異なる。なお今回の調査では，endeavour の他動詞用法で that 節を取る例は見られなかった。

前置詞句を伴う用法は主に16世紀から18世紀にかけて見られる。これらの前置詞句は労苦の目的を表し，after, at, in, for, to に導びかれる。[12]この用法は19世紀前半には例がなく，19世紀後半には100例ごとの頻度がわずか1.4である。

(13) A bloody king *endeavoured for his destruction*. (1649 Jer. Taylor *Gt*. *Exemp*. i. viii. 113) [*OED*]

---

[12] この前置詞句は to 不定詞と等位接続され得た。これは両者が同等の機能を担っていたことを示すと考えられる。
(i) I endeavoured *at no beauty of style,* but *to keep* as literally as I could to the sense of the author Epictetus. (1710 Lady M. W. Montagu *Let*. *to Bp*. *Salisbury* 20 July (1893) II. 2) [*OED*]

16～17世紀には endeavour が目的を表す要素を取らない例が見られる。

(6) The pardon of his Holines, giuen to all ... that *indeuor in this quarrell*.

(14) It is better therefore to *endeuour priuily,* to steale, if we can, and to lay hold of .. a peece of the void mountaine, than etc.. (1623 Bingham *Xenophon* 73) [*OED*]

(6) では indeuour に後続する前置詞句は労苦の目的ではなく労苦の行われる場所を表す。(14) では endeuour に様態を表す副詞が後続している。

本節の内容を以下に要約する。

(15) a. 他動詞用法で，endeavour が主語と同一指示の目的語を取る例は，19 世紀に見られるごく少数の孤立例を除いて15世紀から17世紀に分布する。

b. 他動詞用法で目的語が主語と同一指示でない例は主に16～17世紀に見られ，18世紀以降急激に減少する。

c. 自動詞用法の to 不定詞を取る例は主に16世紀から見られ，その後頻度を増し PE まで存続する。また17～19世紀に endeavour の主語が無生物になる例が見られる。

d. 自動詞用法の that 節を取る例は主に16～17世紀に見られ，18世紀以降はほとんど見られなくなる。これらの例においては，endeavour の主語と that 節の主語は一致しない。

e. 自動詞用法で，労苦の目的を表す前置詞句を伴う例は主に16～18世紀に見られる。

f. 自動詞用法で，補部を取らない例は16～17世紀に見られる。

３．考察

本節では，前節で提示した資料にもとづき，主語と同一指示の目的語が編入されたことで endeavour が自動詞化したとする Green (1974:62-65) の仮説を検証し，endeavour の他動詞用法と補部を取らない自動詞用法が消失した時期を推定する。

Green (ibid.) は，endeavour に見られる他動詞用法の消失は主語と同一指示の目的語が endeavour に編入されたために起きたと主張する。この主張を本論の資料で検証しよう。前節で見たとおり，主語と同一指示の目的語を取る用法 (16) は，19世紀の孤立例を除いて15～17世紀に見られる。

(16) endeavour + 主語と同一指示の目的語（+ {to 不定詞 / 前置詞句}）[13]

[13] 丸かっこは随意性を，ブレースは選択性を表す。

もし主語と同一指示の目的語の編入による自動詞化が起きたなら，自動詞用法 (17) が (16) の各用法に先行しないことが予測される。

(17) endeavour + { to 不定詞 / 前置詞句 / that 節 }

表１，２の資料を見ると，自動詞用法は15世紀以降に例が見られることが分かる。出現順序の観点からは，自動詞用法が主語と同一指示の目的語を取る他動詞用法の自動詞化したものであると考えることに問題はない。

次に両者の頻度の通時的推移に注目しよう。表２に見るように，主語と同一指示の目的語を取る他動詞用法の衰退と反比例して自動詞用法は頻度を増している。図１に両用法の頻度の移り変わりをグラフで示す。

図１：主語と同一指示の目的語を取る他動詞用法と自動詞用法の頻度の史的変化 [14]

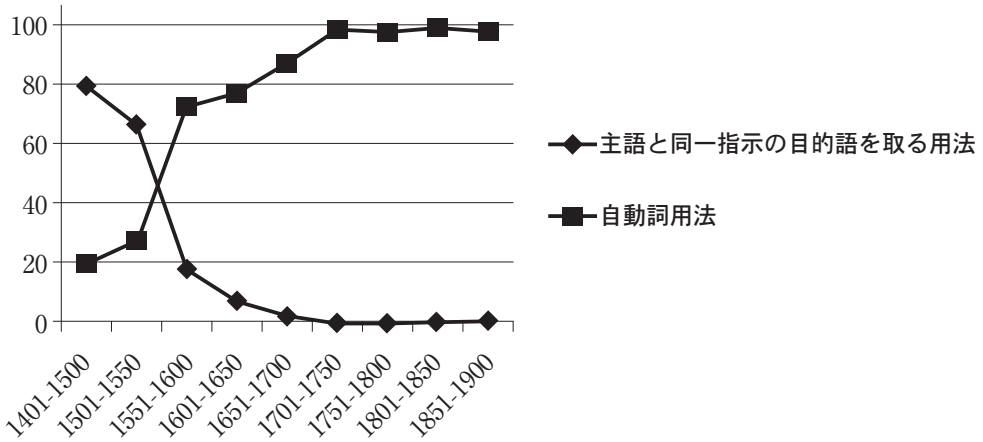

図１を見ると，主語と同一指示の目的語を取る他動詞用法は16世紀後半に急激に頻度を落とし，17世紀には100例中で10を下回り，18世紀以降は100例中，１未満になる。対照的に，自動詞用法は16世紀後半に急激に頻度を高め，17世紀には100例中80を越えるようになり，18世紀以降は100例中90を越える。両者の頻度の通時的変化は対称的な S 字曲線を描いており，これは競合する形式間の史的変化に見られるものである（Fischer (1997)）。

以上，主語と同一指示の目的語を取る他動詞用法と自動詞用法の出現順序と両者の頻度の史的変化から，主語と同一指示の目的語の編入によって endeavour が自動詞化したとする Green(ibid.) の主張は妥当であると判断される。

次に，endeavour の他動詞用法と補部を取らない自動詞用法が消失した時期を推定する。

[14] 表の縦軸は用法の100例中の頻度を表し，横軸は年代を表す。

前節で見たとおり，主語と同一指示の目的語を取る他動詞用法は19世紀に見られるごく少数の孤立例を除いて17世紀を最後に消失し，補部を取らない自動詞用法も同じく17世紀中に消失している。また，主語と非同一指示の目的語を取る用法は主に16～17世紀に分布し，18世紀以降は急速に衰退している。これらの事実を総合すると，他動詞用法と補部を取らない自動詞用法が廃れたのは17世紀と推定される。確かに，主語と同一指示の目的語を取る用法の19世紀の例と，主語と非同一指示の目的語を取る用法の18～19世紀の例を例外としない見方もあるが，この見方を取った場合，endeavour の用例の数が18世紀以降増加しているにもかかわらず，補部を取らない自動詞用法がその時期にまったく見られない事実が不自然に映る。これに加えて，他動詞用法が18世紀に入り急激に減少した事実も説明できない。よって本論では，２つの他動詞用法と補部を取らない自動詞用法は17世紀で廃れたと主張する。

以上で，主語と同一指示の目的語が編入されたことにより endeavour が自動詞化するという Green の主張が本論の資料から支持されることが示された。そして２つの他動詞用法と補部を取らない自動詞用法が失われたのは17世紀であると推定された。

４．結語

本論では，まず *OED*, *MED* の全文検索から得られた資料を提示した。そしてそれにもとづいて，ME から ModE に観察される endeavour の他動詞性の通時的変化について考察し，主語と同一指示の目的語を編入することで endeavour が自動詞化したとする Green (1974:62-65) の見解が妥当であることを示した。さらに Green (ibid.) では特定されていない，２つの他動詞用法と補部を取らない自動詞用法が失われた時期は，17世紀であると主張した。

このように，Green の提案は endeavour が歴史的に自動詞化したことを適切に捉えることができるが，本論で提示したデータには Green の提案では捉えきれない側面がいくつかある。本論を結ぶに当たり，今後の課題としてそれらを指摘しておきたい。１点目として，endeavour は自動詞化した後，なぜ to 不定詞を取る用法に限定されるようになったのかという問題がある。もし endeavour に起きた変化が自動詞化だけであるなら，ModE に見られる，主節主語と異なる主語を持つ that 節を取る用法や前置詞句を取る用法が廃れる必然性はない。なぜ廃れたのか今後さらに研究を続ける必要がある。２点目の課題は，ModE の to 不定詞を取る自動詞用法で無生物主語が現れることである。Endeavour は，その語義を考慮すると無生物主語は取れないはずであり，このような用法が出現するのは興味深い。３点目の課題は，PE での変化である。本論では PE の資料は Green (1974) のみを挙げたが，20世紀前半において endeavour はどのような振る舞いを見せたのか調べる必要がある。これら３点について今後調査と考察を進めていきたい。

参考文献

Fischer, A. (1997) "The Oxford English Dictionary on CD-ROM as a Historical Corpus: *To Wed* and *to Marry* Revisited," *From Ælfric to the New York Times: Studies in English Corpus Linguistics,* ed. by U. Fries, V. Müller and P. Schneider, 161-172, Rodopi, Amsterdam.

Green, G. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity,* Indiana University Press, Bloomington.

Kurath, H., et al. (1952-) *Middle English Dictionary,* University of Michigan Press, Ann Arbor. (http://quod.lib.umich.edu/m/med)

Macpherson, C. B. (ed.) (1985) *Leviathan or the Matter, Forme, and Power of a Commonwealth, Ecclesiastical and Civil,* by Thomas Hobbes, Penguin Books.

Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner (1989) *The Oxford English Dictionary,* 2nd. ed., on CD-ROM Version1.14 (1994), Clarendon Press, Oxford.